

身につくと言う事

テレビ等の歌番組で歌手の唄っている歌を聞いてみると、耳にはよく節まわしもいつしか覚えてよく知っているように思いますが、いざ自分で唄ってみるとそれがなかなかうまく唄えるものではありません。これは、歌は知っているが身につけていないからです。

歌ひとつにしても自分で唄えるようになるには、いくら耳に馴染んだ歌でも自分で声をだして何度も稽古し、時には人前で唄って行かなければなりません。字を書くのも同じことです。他人の書いた字を見て、うまい字だなあ、美しい字だなあとよく批判できてもいざ自分が書いてみるとなかなかうまく書けるものではありません。字がうまくなるには、まず先生に付いて手本を頂き何回もくりかえし練習し、次に他人にも見てもらい、さらには他人の手を取って教えさせて頂く、と言うことをさせて頂いていくと字もうまく書けるようになるのではないのでしょうか。

歌も耳がこえている・書道も目がこえている・それだけでは駄目なのです。

我が道の信心も同じことで、長年教会へ参拝して話は耳にたこができるほど聞いていると言う人でもなかなか信心は身に付いてないと思われる人が多いのではないのでしょうか。信心

が身について神の気感になつた氏子にお育て頂くには教祖の教えどおり

一つ、日々教会へ足を運んで教話を頂いていく。話を聞いて助かるのぞ。

二つに、話を聞くばかりが能ではない、我が心からも練りだせ。

三つには、信心しておかげを受けたら神心となつて人に丁寧な話をしていくのぞ、とあります。

要するに、聞く・練りだす・話をしていくの三つです。三つでひとつと言うのは立体的と言うことです。

料理がうまくなるというのも色々食べてみて、作つてみて、人にも食べて頂いてはじめて上手になるものです。料理が身につくものにも何年もかかると言うことです。

これほど信心しているのにどうしてこのようないことが起こるのかと思つたり、有り難く思えなかつたりするのは、信心の稽古がつぼにはまっていからで、どうぞ身につく稽古のおかげを頂いてください。